

青年期における自己の多元性とアイデンティティの関連 —自我構造の類型化及び質的側面からの検討—

田中源造¹・田爪宏二²

(1:京都市立桃陽総合支援学校・2:京都教育大学)

The Relationship Between Multiplicity of Self and Identity in Adolescence: A Typological and Qualitative Examination of Ego Structure

Genzo TANAKA, Hirotsugu TAZUME

抄録: 青年期においては、複数の環境で多様なキャラクターを使い分けながらも、従来のアイデンティティ概念における拡散状態に陥っていない者の存在が確認されている。本研究では、こうした青年を「多元型」と定義し、従来のアイデンティティ概念に基づく確立状態の青年を「一元型」、拡散状態の青年を「不定型」として位置づけて類型化を行い、多元型の特徴を検討することを目的とした。研究1では、複数の環境における自我の確立の程度及びそれぞれの環境におけるキャラクターのオーバーラップ度を表す仮説モデルを元に、これらの類型化を試みた。その結果、多元型および一元型はいずれも、不定型と比較して抑うつ感得点が有意に低いことが明らかとなり、類型の一定程度の妥当性が示された。研究2では、研究1で明らかにならなかった多元型と一元型の違いについて、質的側面から検討した。その結果、多元型は、「自己受容性が高いこと」、「自己変容性における両価的評価志向が高いこと」、「環境に合わせて自我を確立させること」の3つの可能性が示された。

キーワード: アイデンティティ, 多面的自己, 抑うつ, 自己受容性, 自己変容性

Key Words: identity, multifaceted self, depression, self-acceptance, self-transformability

I. 問題と目的

1. 青年期におけるアイデンティティと自己の多面性

青年期の発達課題としてアイデンティティの確立が挙げられる。Erikson (1959)はアイデンティティについて二つの特徴を挙げている。一つは、「個人が自分を現在までつながる連続性をもった存在であり、いつも同じ存在であるという同一性を自覚している」こと、もう一つは、「本人だけでなく他者もその人が同一人物で連続性をもった存在であるということ認識している」ことである。ここから、Eriksonの述べるアイデンティティ概念における中核を担う要素の一つとして、「自己斉一性・連続性（自分が自分であるという一貫性をもっており、時間的連続性をもっているという感覚）」が挙げられる。また、Erikson (1968)は、アイデンティティの確立の程度が精神的健康に影響を与えることを指摘している。つまり、アイデンティティが確立している青年は精神的健康が安定する傾向にあり、反対に拡散している青年は抑うつ傾向にあるとされている。

先に述べたEriksonの理論では、青年期においては自己斉一性・連続性が精神的健康を保つ上で重要であるとされる。すなわち、自己の一貫性がないことは精神的健康にとって負の影響を及ぼすと考えることが出来る。しかしながら、現代においては、自己の一貫性を欠きながらも精神的健康を維持している青年の存在が指摘されている。自己の一貫性と認知的不協和に関する研究を行った田島(2013)は、自己の多面性が必ずしも認知的不協和をもたらし精神的健康に悪影響を及ぼすわけではないことを指摘した。具体的には、多面性に違和感があっても、その上でさらに多面性を受容するための条件が整うことで、精神的健康が最も高まることが示された。さら

に、多面的な自己をもちながらも抑うつ傾向に陥らない青年の事例は臨床場面においても報告されている(桐山, 2010; 渋川・松下, 2010; 高石, 2000, 2009)。これらは、現代においては「自己斉一性・連続性」が感じられなくとも、自己の多面性を保ちながらアイデンティティを拡散させない青年が存在することを示している。

2. 自己の多面性に基づくアイデンティティの類型化

自己の多面性を保持しつつもアイデンティティを拡散させていない青年を類型化した研究として、木谷・岡本(2018)の研究が挙げられる。この研究では、従来のアイデンティティ確立地位における確立状態にあたる青年を「一元型自己群」、拡散地位にあたる青年を「自己拡散群」、多面的な自己をもちつつも精神的健康を保っている青年を「多元的自己群」として類型化し、各群の青年のアイデンティティ感覚の検討をおこなった。その結果、現代においては、適所を選択し、重要な他者からの承認によって内的及び社会的な同一性を確立する青年と、それぞれの場面に応じて自己を変化させ、場面ごとに異なるアイデンティティを形成する青年が存在することを明らかにした。しかし、課題として、研究で用いられた自己意識尺度(岩田, 2006)の中の自己複数性因子は心理学的観点から構成概念等が検討されておらず、一元型自己群の中に自己を使い分ける青年が含まれていたということが挙げられている。つまり、青年を類型化するにあたって、より妥当性の高い方法を用いて類型化を行い、その精度を高める必要があると言える。

3. 青年の自我構造の仮説モデル

そこで本研究では、青年の自我構造をより精緻に類型化するために、多面的な自己をもちつつもアイデンティティを確立させている青年を表すことができる仮説モデルを考案し、これに基づいて青年を分類することとする。多面的な自己を表すモデルは、先行研究でも示されている。杉浦(2017)は、多元的自己のプロセスモデルを「多元的循環自己」と称し、説明している。このモデルは、行動主体が外部の環境や他者などに向けて行った行動及び返ってきたフィードバックが記憶痕跡として蓄積されていき、その痕跡が濃くなれば濃くなるほど行動主体において重要な自己が形成されていくことを提唱したモデルである。さらにこのモデルにおいて重要な自己(軌跡の濃い作動自己)は複数形成され得ることが述べられている。これを踏まえ、杉浦は3つの自我構造の類型を挙げている。すなわち、①複数の「濃い循環」の軌跡としての自己を認識出来ている状態(例: 家庭人としての自分、仕事人としての自分など、それぞれの分野で関係や実績をしっかりと形作っている人物)、②唯一の「濃い循環」を認識している状態(例: スポーツ一筋のスポーツ選手、仕事に打ち込み家庭を顧みないサラリーマンなど)、③どの循環も十分な重なりが認識されず、これこそが自分と言った確信を持てる自己の無い人物である。

このモデルは、多元的な自己を表すことを可能にしたモデルであるが、アイデンティティを表すモデルとしては不十分であると考えられる。例えば、家庭、仕事、ボランティアなど複数の環境の中で多元的な自己を実現する人物(複数の「濃い循環」の軌跡としての自己を認識出来ている状態)について、それぞれの環境における本人のキャラクターが一貫していれば、従来のアイデンティティ概念における一元型に分類されると言える。つまり、このモデルでは、複数の環境におけるキャラクターの違いを反映していないため、前項までに述べた「複数の環境において様々なキャラクターを使い分けるが、従来のアイデンティティ概念における拡散状態に陥っていない青年」を表すことが出来ないのである。そこで、その点を補完するために本研究ではFigure 1に示すモデルを考案した。

このモデルにおいて青年のアイデンティティを決定づける要因は「各環境におけるキャラクター及びその距離」と、「各環境における自我の確立の程度」である。まず、キャラクターについては、それぞれの環境における性格特性語によって決定する。例えば、Figure 1の中央に示されている「大学」に居る時のキャラクターは、「明るい」、「朗らか」、「外向的」を含む複数の性格特性語によって構成されていることが分かる。また、それぞれの環境におけるキャラクターの距離については、各々の性格特性語がどの程度重なっているか(オーバーラップ度: 以後OL)により決定する。OLは各環境で選択された性格特性語の数のJaccard係数により算出する。例えばAとBという環境の性格特性語の数についてのOLは、「 $A \cap B / A \cup B$ 」で求められる。尚、Figure 1には各々の

環境について3つずつの性格特性語しか表記していないが、本研究では40項目の性格特性語を用いることにする。

次に、自我の確立の程度については、それぞれの環境における自身のキャラクターをどの程度「自分らしい」と感じるかによって決定する。つまり、Figure 1においては、左端の「家族」、中央の「大学」、右端の「恋人」の環境に居る時については自分らしいと感じているのに対して、それ以外の環境については自分らしいとは感じていないということになる。このモデルを用いて現代における青年のアイデンティティを類型化したものをFigure 2に示す。

Figure 2の自我構造をそれぞれ、「①多元型」「②一元型」「③不定型」と定義する。まず多元型については、左端、中央、右端の環境はキャラクター間の距離が離れているにも関わらず、そのどれもを「自分らしい」と感じていることから、先述した「複数の環境において様々なキャラクター（性格）を使い分けるが、従来のアイデンティティ概念における拡散状態に陥っていない青年」に該当すると言える。次に、一元型については、中央の3つの環境について、キャラクター間の距離が近く、且つそのどれもを「自分らしい」と感じていることから、従来のアイデンティティ概念における「確立」状態に該当すると言える。最後に不定型は、全ての環境において自我の確立の程度が低い状態であり、従来のアイデンティティ概念における「拡散」状態に相当すると考えられる。

ところで、従来のアイデンティティ概念においては、アイデンティティが確立している状態では精神的健康が安定し、拡散している状態では不安定になる傾向にあるとされる。故に、従来のアイデンティティ概念における確立状態に相当する一元型は、拡散状態にあたる不定型に比べて抑うつ感が低くなることが予測される。さらに、自己の多面性をもっていても、それを受容することで精神的健康が高まるという研究結果（田島, 2013）から、多面的な自己を自分らしいと感じている多元型は、一元型と同様に、不定型に比べて抑うつ感が低くなると考えられる。そこで本研究においては、抑うつ感を仮説モデルの妥当性を確かめるための指標として用いることとする。

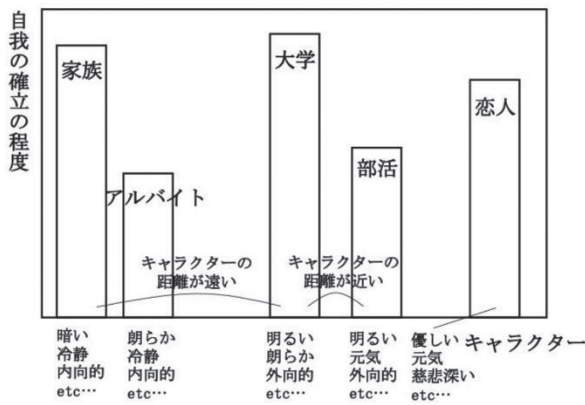


Figure 1 現代の青年における自我構造の仮説モデル

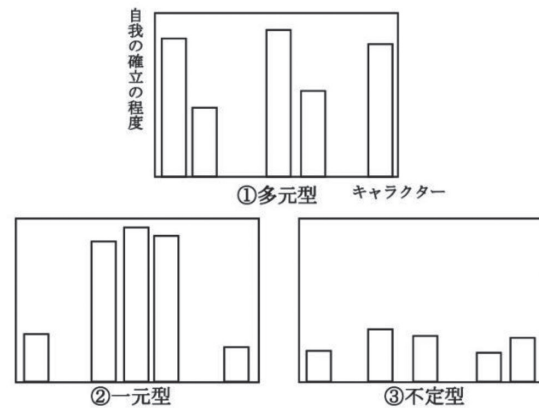


Figure 2 自我構造の類型

4. 本研究の目的

本研究では、青年の自我構造をより精緻に類型化するために、仮説モデルに基づいて青年を分類し、抑うつ感を指標としてその妥当性を検討すること（研究1）、および、類型化された青年に対して半構造化面接を実施し、質的側面からの検討を加えることで、自己の多面性を保持しつつアイデンティティを拡散させない青年の特徴を探索的に明らかにすること（研究2）を目的とする。

II. 研究1：自我構造に基づく青年期のアイデンティティの類型化

研究1では、質問紙法により環境ごとのキャラクターの重なり程度の程度及び自我の確立の程度を測定することで、

設定した自我構造の仮説モデル(Figures 1, 2)に則って青年のアイデンティティを類型化することを目的とする。具体的には、佐藤(1999)を元にした特性語分類課題及び、下山(1992)のアイデンティティ尺度を元に作成した自我尺度を用いて調査協力者を類型化する。尚、本研究ではアイデンティティの類型の妥当性の指標として、抑うつ感を取り上げる。先に述べたように、多元型及び一元型の青年は、不定型の青年に比べて抑うつ感が低くなることが予測される。そこで本研究では、杉山(2018)の抑うつ感尺度を用いて、類型による抑うつ傾向の比較を行う。

1. 方法

(1) 調査協力者及び実施時期

4年制大学の1年生～4年生計211名(男性64名,女性147名)を対象に,2019年9月～10月に調査を行った。

(2) 調査の手続きと倫理的配慮

質問紙調査は大学の講義の一部を使用し,集団式,自記式により実施した。その際,対象者に対する倫理的配慮として,調査への参加は任意であり,講義の成績とは無関係であることや,個人情報の保護,情報の管理などについて説明し,同意を得た上で調査を実施した。

(3) 調査内容

①フェイスシート

「専攻」,「学年」,「性別」の3項目を尋ねた。

②抑うつ感

杉山(2018)の抑うつ感尺度を用いた。抑うつ感尺度は,「私は今の私がいやだ」など9項目で構成されており,各設問に対して「よくあてはまる(5)」～「全くあてはまらない(1)」までの5件法で回答を求めた。

③所属する環境

現在の協力者にとって重要な環境(所属するコミュニティ,もしくは重要な他者)を5つ挙げてもらった。その際,個人名をイニシャルで書くなど,後の質問に答えるにあたって自分で分かれば詳細に書かなくてもよいことを伝えた。

④環境ごとの自我の確立の程度

調査協力者に挙げてもらった各環境における自我の確立の程度を測定するために,下山(1992)のアイデンティティ尺度の下位尺度である「アイデンティティ確立」の各項目の文頭に「この環境において」という文言を加筆したものを使用した。項目は「この環境において,私は,自分の個性をととても大切にしている」など8項目で構成されており,各設問に対して「よくあてはまる(4)」～「全くあてはまらない(1)」の4件法で回答を求めた。

⑤特性語分類課題

環境ごとのキャラクターの重なりをOLを測定するために,佐藤(1999)に基づいた特性語分類課題を行った。参加者は挙げた各環境について,40項目の特性語(「陽気な」「内向的な」など(林・堀内,1997))それぞれが該当するか否かを回答するよう求めた。

2. 結果

本研究の統計分析にあたっては,HAD Ver.16(清水,2016)を使用した。

(1) 自我構造の類型化

有効回答と認められた調査協力者の自我構造を3型に類型化した。その際に基準としたのは,「環境ごとの自我の確立の程度」及び「環境ごとのキャラクターのOL」である。

環境ごとの自我の確立の程度は $M=3.15$, $SD=0.59$ であり, $M \pm 0.5SD$ を基準に高,中,低の判断を行った。また,2つの環境ごとのOLについて,一般的にJaccard係数の高低の目安とされる60%を基準として,60%以上の場

合はキャラクター間の距離が近く、60%未満の場合は距離が遠いと判断した。これを踏まえて、複数の環境において自我の確立の程度が中程度以上で、かつその間のOLが低い(60%未満)場合を「多元型」とした。これは複数の異なるキャラクターを使い分けつつも、各環境で「自分らしさ」を感じられる青年を表す。さらに、一つもしくは複数の環境で自我の確立の程度が中程度以上で、かつその間のOLが高い(60%以上)場合を「一元型」とした。これは従来のアイデンティティ概念における「確立状態」に相当する。そして、全ての環境において自我の確立の程度が低い場合を「不定型」とした。これは従来のアイデンティティ概念における「拡散状態」に相当する。類型の結果をTable 1に示す。

また、性別と類型の間の関連を検討するためにカイ2乗検定を行ったところ、全体では有意な関連は見られなかった($\chi^2(2, N=211)=3.23, p=.199$)。しかし、残差分析の結果、多元型($p=.047$)においては女性が有意に多いことが確認され、一元型($p=.132$)及び不定型($p=.467$)については性別による有意な人数差が確認されなかった。

Table 1 自我構造の類型ごとの人数

	多元型	一元型	不定型	合計
男性	24(37.5)*	25(39.1)	15(23.4)	64(100)
女性	77(52.3)*	42(28.6)	28(19.1)	147(100)
合計	101(47.9)	67(31.8)	43(20.3)	211(100)

カッコ内は%

*: $p<0.5$

(2) 因子分析

抑うつ感尺度の9項目について、因子分析(最尤法)を行った。因子数は固有値の減衰パターンから、原尺度(杉山, 2018)と同じく1因子構造が妥当であると判断した。内的整合性は十分な値が得られた($\alpha=.868$)。次に、環境ごとの自我の確立の程度を測定する尺度8項目について因子分析(最尤法)を行った。本尺度は下山(1992)のものに加筆及び修正を行っているため、探索的に分析を行った。また、複数の環境について回答を求めたため、各調査協力者について項目ごとに環境間の平均値を算出し、因子分析を行った。その結果、因子数は固有値の減衰パターンより、1因子構造が妥当であると判断した。内的整合性は十分な値が得られた($\alpha=.931$)。

(3) 自我構造の類型による抑うつ感の比較

自我構造の類型ごとの抑うつ感得点の平均値と標準偏差をTable 2に示す。1要因分散分析の結果、主効果が有意であり($F(2, 208)=11.28, p<.001$)、5%水準のHolm法による多重比較の結果(以下、多重比較の方法は同じ)、不定型の抑うつ感得点は、多元型と一元型のそれよりも有意に高かった。多元型と一元型の抑うつ感得点には有意な差は見られなかった。

Table 2 自我構造の類型による抑うつ感得点の平均値(M)と標準偏差(SD)

	類型			F	多重比較
	多元型	一元型	不定型		
M	2.63	2.76	3.24	11.28***	不定型>多元型, 一元型
(SD)	(0.74)	(0.73)	(0.61)		

*** $p<.001$

(4) 自我構造の類型による環境ごとの自我の確立の比較

自我構造の類型ごとの自我の確立得点の平均値と標準偏差をTable 3に示す。1要因分散分析の結果、主効果が有意であり($F(2, 208)=61.10, p<.001$)、多重比較の結果、不定型の自我の確立得点が、多元型と一元型のそれよりも有意に低かった。多元型と一元型の自我の確立得点には有意な差は見られなかった。

Table 3 自我構造の類型による環境ごとの自我の確立得点の平均値(M)と標準偏差(SD)

	類型			F	多重比較
	多元型	一元型	不定型		
M	3.26	3.31	2.62	61.10***	不定型<多元型, 一元型
(SD)	(0.32)	(0.41)	(0.31)		

*** $p<.001$

3. 考察

抑うつ感について、多元型及び一元型は、不定型よりも有意に低かった。この結果は、臨床場面における先行研究で示されているように「多面的な自己をもちながらも抑うつ傾向に陥らない青年」の存在を示すものであると言える。さらに、環境ごとの自我の確立の程度については、多元型及び一元型は、不定型よりも有意に高かった。この結果から、多元型は一元型と同様に、不定型に比べて従来で言うところのアイデンティティの確立状態にあると解釈できる。従来のアイデンティティ研究では確立-拡散状態を一元型と不定型とに対応させてきた。しかしながら、本研究の結果を踏まえると、アイデンティティの確立状態には一元型に加えて、多元型、すなわち多面的な自己をもちつつも抑うつ傾向には陥らない青年の存在を確認することができる。

また、加藤(1983)の自我同一性地位判定尺度を用いた先行研究(伏見・井森, 2017; 水本・山根, 2011; 西田他, 2011; 佐藤・岡本, 2010; 吉中, 2016)によれば、従来のアイデンティティの拡散状態にある青年は全体の10~20%程度であるが、Table 1をみると本研究において拡散状態に位置づけられる不定型の割合も20%程度であり、従来の研究に近い数値を示している。

一方で、抑うつ感得点及び自我の確立得点の両方で、多元型と一元型の間に有意な差は見られず、量的な観点からはこれらの種類の違いを明らかにすることはできなかつた。しかし、木谷・岡本(2018)は、多面的なアイデンティティをもつ青年について、「本当の自分」の捉え方や社会的な同一性の確立の点で、一元的なアイデンティティをもつ青年とは異なる可能性があることを指摘している。ここから、両類型は自己の捉え方や自我の確立過程等の質的な側面において、異なる特徴を有している可能性が考えられる。そこで、研究2では面接法を用いて質的な視点から多元型と一元型の違いを追求していく。

Ⅲ. 研究2：多元型と一元型の差異に関する質的検討

1. 目的

研究2では、多元型と一元型の青年を対象に半構造化面接法を用いて、これら2種類の質的な差異から多元型の特徴について探索的に検討を行う。

調査内容として、3つの質問を主軸としてインタビュー調査を行った。まず、自身の自我構造に対する印象についての質問である。自己の多面性と主観的Well-beingの関連を検討した木谷・岡本(2016)は、多面的な自己を持つ青年は、そうでない青年と比べて、一部の側面において自己像をポジティブに認識する傾向にあることを指摘している。そこで本研究では、自身の自我構造に対してポジティブもしくはネガティブのいずれの印象を持っているかについて検討するため、「環境に応じてキャラクターを使い分ける(使い分けない)自分自身についてどのように感じていますか。」という質問を行った。

次に、相互の自我構造に対する憧れ及び自己変容願望についての質問である。大学生の自己変容と自我同一性地位との関連を検討した千島(2014)は、アイデンティティの確立状態にある同一性達成地位については、他の地位よりも自己を全面的に変容させる志向性は低い一方で、自己の問題を改善する志向性が高いことを指摘している。本研究においては、相互の自我構造に対する憧れ及び自己変容願望の差異を検討するため、「環境に応じてキャラクターを使い分け(使い分け)人になりたいと思いますか。」と尋ねることとした。

最後に、自我構造の形成時期及びその背景要因についての質問である。自己概念の形成過程を縦断的に調査し

た鳥居他(1991)は、自己概念は小学6年生から中学1年生において大きく変化し、中学3年間を通して形成されていくことを指摘した。本研究では多元型を含めた現代の青年の自我構造の形成時期及びその背景要因について検討することを目的に、「現在と比較して小学生の頃は、キャラクターの使い分けを行っていましたか。」という質問を行い、その後中学生、高校生、大学生の時期についても同様の質問を行った。そしてキャラクターの使い分けに変化があった時期について、「その時にキャラクターを使い分ける(使い分けない)ようになったことのきっかけについて何か心当たりはありますか。」と尋ねた。

以上の3つの質問を通して得られた発話プロトコルを整理し、それぞれの類型で顕著となった発話内容を比較することで、両類型の差異について検討することを目的とする。

2. 方法

(1) 調査協力者及び実施時期

研究1のアンケート調査の際に、インタビュー調査への協力をお願いし、同意が得られた方を調査対象者とした。対象者は大学2年生～4年生の女性9名であり、2019年11月に調査を行った。対象者の内、研究1において多元型に分類された対象者は5名、一元型に分類された対象者は4名であった。

(2) 調査の手続きと倫理的配慮

面接調査は個室において個別に実施した。対象者には個人情報の保護、情報の管理、調査協力の取りやめが可能であることなどの倫理的配慮について説明し、同意を得た上で調査を実施した。また、許諾を得た上でボイスレコーダーを用いてインタビュー内容を記録した。

(3) 調査内容

①自身の自我構造に対する印象

「環境に応じてキャラクターを使い分ける(使い分けない)自分自身についてどのように感じていますか。」と尋ね、自身の自我構造に対する印象についてポジティブかネガティブか、さらにはその詳細について回答を求めた。

②相互の自我構造に対する憧れ及び自己変容願望

「環境に応じてキャラクターを使い分け(使い分け)人になりたいと思いますか。」と尋ね、相互の自我構造に対する憧れや、自己変容への願望の有無、およびその具体的内容について回答を求めた。

③自我構造の形成時期及びその背景要因

「現在と比較して小学生の頃は、キャラクターの使い分けを行っていましたか。」という質問を行い、その後中学生、高校生、大学生の時期についても同様の質問を行った。そしてキャラクターの使い分けに変化があった時期について、「その時にキャラクターを使い分ける(使い分けない)ようになったことのきっかけについて何か心当たりはありますか。」と質問を行った。

3. 結果と考察

(1) 自身の自我構造に対する印象

自身の自我構造に対する印象についての発話内容の事例をTable 4に示す。

一元型においては、1-1「人間関係が心地よくなる」や1-3「すごく対人関係が楽」等、従来のアイデンティティ概念における確立状態同様、社会に適応的である様子が窺え、ポジティブな印象を抱いていることが窺われる。さらに、1-3「合わせて変えているっていうよりは、自分に合わせてもらう方が楽」と、自分が周りに合わせるのではなく、周りに合わせてもらうことで社会に適応する発言も見受けられる。

対して多元型においては、1-4「その人に合わせて変えながら接していくっていうのもコミュニケーションの方法かな」とポジティブに捉える意見がある一方で、1-6「相手の顔色窺って、違う態度とったりするところは嫌」や1-7「なんで変えてまうんやろう」とネガティブに捉える意見もある。しかし、1-4「それはそれで自分なのか

な」, 1-5「どれも自分かな」, 1-6「まあこれも自分やしな」と、環境に応じてキャラクターを使い分ける自分を受容するような発言も多くみられた。ここから、そういった自己を受容することでポジティブに昇華している可能性が考えられ、自己受容性の高さが窺われる。

Table 4 類型ごとの自分自身の印象に関する発話内容 (一部抜粋)

類型	印象	事例番号	発話内容
一元型	ポジティブ	1-1	キャラを演じてたら、やっぱり結局そういう自分を好きになったんで。これで形成できた人間関係が心地よくなってるので。これでいいのかな一みたいなところはありますね。
		1-2	別に変えてまでそこに所属したいっていう風には思わないです。なので今の自分自身についてはこれでいいかなって思います。 合わせて変えているっていうよりは、自分に合わせてもらう方が楽やなって
		1-3	思ってしまうところがあるので、自分としては <u>すごく対人関係が楽だ</u> なっていうふうに思います。
多元型	ポジティブ	1-4	<u>その人に合わせて変えながら接していくっていうのもコミュニケーションの方法</u> かなって思います。キャラクターを使い分ける自分についても <u>それはそれで自分</u> のかなって思います。 <u>どれも自分</u> かなとは思ってて、キャラクターを使い分けることに対して抵抗
		1-5	とかはないです。全部自分かなみたいな。すごいプラス思考かもしれないんですけど。
		1-6	<u>相手の顔色窺って、違う態度とったりする</u> ところは嫌です。でもまあしゃーないかなあみたいなところはあります。「 <u>まあこれも自分やしな</u> 。」みたいな感じです。
	ネガティブ	1-7	<u>なんで変えてまうんやろう</u> って思ったりはありますね。友達の前でも家族といる時と同じように接したいとは自分で思ってるんですよ。

(2) 相互の自我構造に対する憧れ及び自己変容願望

相互の自我構造に対する憧れ及び自己変容願望についての発話内容の事例を Table 5 に示す。

一元型は、多元型へ憧れる傾向は弱く、2-1, 2-2, 2-3 のように、「自分自身に満足している」という発言が目立った。これらの発言から、千島(2014)と同様に、一元型は自己変容志向が低いことが推察される。

対して多元型は、2-4 のように一元型への憧れを示す人もいる一方で、2-5 のように部分的に一元型のようになりたいと考える発言もみられた。また、2-6「今の自分でいいかな」、2-7「無理してならなくてもいいかな」、2-8「一歩下がってコミュニケーションとった方が教えてもらいやすい」のように、今の自分に満足する発言も多くみられた。「今の自分でいい」といった発言に加えて、全面変容及び部分的変容を望む発言も確認されたことから、多元型は一元型に比べて自己変容についての両面的評価、すなわち「自己変容と現状維持の両方を受け入れ、肯定的に評価している」志向が強い可能性が考えられる。

Table 5 お互いの自我構造への憧れに関する発話内容 (一部抜粋)

類型	憧れ	事例番号	発話内容
一元型	どちらとも言えない	2-1	ずっとこの明るいテンションでいってるとそこにそぐわない場面もやっぱりあるんで、なりたいたとも思いますけど、でも <u>今の自分に満足はしてる</u> ので別にいいかなって感じです。
	多元型になりたいと思わない	2-2	(多元型になりたいと思うことは) 特にはないです。 <u>今の自分自身に満足してる</u> ので。
		2-3	凄いなあとは思いますが、大変そうなのであまり憧れはないです。やりたいなとは思いません。 <u>今の自分自身で満足してますし</u> 。

多元型	一元型に なりたいと 思う	2-4	(一元型になりたいと) 思ったりします。 <u>自分をもっと出したいなっていう時に出てこない</u> っていうか。
	どちらとも 言えない	2-5	完璧に全部一緒っていうのはちゃうかなって。やっぱ家族と友達は過ごしてきた年数も違うし、環境も違うから。でも、すごい違いがありすぎるっていうのはダメなんかなって思って、 <u>ある程度は一緒のキャラクターでいたい</u> なって思います。
		2-6	誰にでも優しいっていうか、そういう人たまにいるじゃないですか。そういう人はいいなって思うけど、でも、「自分が思ってることとかちゃんとこの人言えてるのかな。」って思ったら別に <u>今の自分</u> でいいかなって思います。
	一元型に なりたいと 思わない	2-7	そういう人は自分を包み隠さずされていてすごいなと思うんですけど、自分になりたいかと言われればそんなに <u>無理してならなくてもいいかな</u> という感じですよ。
		2-8	年配の人と関わる時ってちょっと違うじゃないですか。ちょっと <u>一歩下がってコミュニケーション</u> とった方が教えてもらいやすいみたいな。ずっと一貫してると年配の人からしたら若いのにでしゃばってると思われるし。

(3) 自我構造の形成時期及びその背景要因

自我構造の形成時期及びその背景要因についての発話内容の事例を Table 6 に示す。

一元型は、中学生の時に反抗期になったこと(3-1)、小中学校は自分に合わない環境であったが高校で自分に合った環境へと移行できたこと(3-2)、高校では父がいたため周りの目を気にしていたが大学に入って気にせず生活できるようになったこと(3-3)等から、自然に自我が発生した場合、または抑圧されていた自我が表出した場合に自我が形成されていることが窺われる。

対して多元型は、中学校や高校に進学して新たな人間関係を構築していく中で、3-4「周りに合わせないと過ごせなかった」、3-5「この場合はこっちの方がいいかな」、3-6「こういう人もいるんや」といった考えから、自らを周りに合わせていった結果、自我が形成されていった可能性が考えられる。尚、自我構造の形成時期に関しては、両類型とも中学生から大学生にかけてとほぼ同時期であり、顕著な差異は確認されなかった。

Table 6 現在の自我構造が形成された時期及び背景要因に関する発話内容 (一部抜粋)

類型	時期	事例番号	発話内容
一元型	中学生の時	3-1	中学生は <u>反抗期</u> になって、そこから「ワー！」って家でも言うようになってます。そこである程度今の人格が出来上がったのかなと思います。
	高校生の時	3-2	小中が人間嫌いだったんですよ。小学校の時はバシられて、中学校の時は真面目な子はじめられたりしてたので。で、高校に入ったら、 <u>周りの子と気が合いやすかった</u> っていうのがあって今の自分になりました。
	大学生の時	3-3	高校の時は私のお父さんが働いている学校に通ってたんですけど、だから学校でも周りの先生の目とか凄く意識してて。それで、 <u>大学に入ってから</u> は <u>周りの目を気にしなくてもよくなった</u> んで、今が一番自分らしい気がします。
多元型	中学生の時	3-4	中学校は荒れてて、色々な状況に囲まれていたので、 <u>周りに合わせないと過ごせなかった</u> のでそれで仕方がないかなと思ってました。
	中学生の時	3-5	スクールカーストがはっきりしてる中学校に行って、友達によって使い分けてたなって思います。いろんな人と関わっていく中で、「 <u>この場合はこっちの方がいいかな</u> 」みたいな。
	高校生の時	3-6	中高一貫校だったんですけど、高校に入る時に中学校にはいなかったような人たちが入ってくるんですよ。そうすると、「 <u>こういう人もいるんや</u> 」っていうような人が入ってきてその時に今の自分が出来上がったんだと思います。

4. 研究2のまとめ

以上より、多元型は一元型に比べて、「自己受容性が高いこと」「自己変容における両価的評価志向が高いこと」「環境に合わせて自我を確立させること」の3つの可能性が示された。ここから、多元型は、自己概念が変わることと変わらないことの両側面を肯定的に捉え、自身の所属する環境や他者に合わせて自我を確立させていき、そういった自己の在り方を受容的に捉えていることが窺われた。つまり、多元型は自身を取り巻く環境に対して非常に適応的であり、且つ可塑性の高い自己概念を有していると考えられる。

IV. 総合考察

本研究では、青年期の自我構造をより精緻に類型化するために、仮説モデルに基づいて青年を分類すること（研究1）、類型化された青年に対して半構造化面接を実施し、質的側面からの検討を加えることで、自己の多面性を保持しつつアイデンティティを拡散させない青年の特徴を探索的に明らかにすること（研究2）を目的として研究を行った。ここでは、まず研究1および研究2の結果を整理し、それらを既存の研究と照合することで新たに得られる知見について考察する。

1. 青年期の自我構造の類型とその特徴

研究1では、環境ごとの自我の確立の程度及びOLの観点から設定した仮説モデル(Figures 1, 2)に基づいて青年を多元型、一元型、不定型に類型化し、抑うつ感尺度を指標として妥当性の検討を行った。その結果、多元型及び一元型は、不定型よりも有意に抑うつ感得点が低くなり、類型には一定の妥当性が示された。

研究2では、研究1で明らかにならなかった多元型と一元型の違いについて、「自分自身の印象」、「相互の自我構造に対する憧れ」、「自我が形成された時期及び背景」の3つの質問を主軸に、各類型の青年に半構造化面接を行った。その結果、多元型は一元型に比べて、「自己受容性が高いこと」、「自己変容性における両価的評価志向が高いこと」、「環境に合わせて自我を確立させること」が示唆された。

木谷・岡本(2018)の類型では、一元型自己群の中に自己を使い分ける青年が含まれていたが、本研究の多元型及び一元型の青年へのインタビューでは、自己の使い分けに関して両群が混在することはなかった。ここから、本研究では従来よりも精緻な類型を提示し得たと考えられる。また、インタビュー調査においては、従来の研究では自己が変化する理由や、本当の自分についてどう思うかといった質問に留まっていたが、本研究では自己受容性、自己変容性、自我の確立時期及び背景の観点から、より詳細かつ多面的な検討を行うことができた。

さらに本研究では、多元型が社会に対して柔軟に適応しており、自己概念の可塑性が高い傾向を示すことが確認された。従来の研究においても、多元的なアイデンティティを有する青年が適応的である可能性は指摘されていたものの、その見解は仮説的な段階に留まっていた。本研究は、多元型の高い適応能力が実証的に確認された点において、重要な意義を有すると言える。

また、多元型において高く示された自己受容性及び自己変容性について、自尊感情との関係を検討した研究がある。吉田他(2019)は、自己受容性尺度を作成し、複数の尺度との関連を検討し、自己受容性と自尊感情の間に強い正の相関があることを明らかにした。さらに、自己変容性と自尊感情の関連を調べた千島(2014)は、自己変容性の捉え方の中の「両価的評価」因子と自尊感情の間に正の相関があることを指摘している。ここから、多元型は他の類型と比べて自尊感情が高いことが推察される。ただし、これは理論的検討に終始している議論であるため、今後は実証的データに基づく検討を通して、その傾向を確認する必要がある。

2. 多元的自己とアイデンティティの関連

研究1において多元型は全体の約半数を占める結果となっている(Table 1)。ここから、現代社会において、青年が自己を使い分けながらもアイデンティティを拡散させない姿はごく一般的であると言える。これを支持する

研究として、川崎(2024)は、女子大学生を対象にインタビュー調査を行い、多元的自己とアイデンティティの関連について検討した結果から、現代青年においてはキャラクターの使い分けが極めて一般的な経験であることを指摘している。

しかし、このようなアイデンティティの在り方は、果たして現代に特有の現象と言えるのだろうか。現代の大学生と、1960年以前出生の成人の友人関係を比較した研究がある。大谷(2019)は、大学生と1960年以前出生の成人を対象に、小学生の頃～70歳頃までを想起して(大学生は社会人以降については予測して)、どの程度「対象切替(場面によって相手を切り替えること)」と「自己切替(場面によって自己を切り替えること)」を行っているかの調査を行った。その結果、大学生と成人の間にはほとんど差が見られなかった。つまり、少なくとも1960年代頃には既に、場面によって相手を選んだり、相手によって自分を変えたりというようなコミュニケーションが行われていたということになる。

ここで、今一度、Erikson(1959)が提唱した自己斉一性・連続性という概念について再考する。三好(2016)は、「Eriksonは同じ一つのまとまりを、その性格の違いから“Wholeness”と“Totality”として区別している。」と述べている。西平(1993)によれば、“Wholeness”とは、「個々の、互いに全く異なる各部分さえもが、有効なまとまりをなし、ひとつの組織となるような各部分の集まり」のことであり、“Totality”とは、「絶対的な境界が強調された、一個のゲシュタルト」のことであり、研究2の発話事例をこの概念に当てはめて考えると、Table 4(1-5)「どれも自分かなとは思って、キャラクターを使い分けることに対して抵抗とかはないです。全部自分かなみたいなの。」は、自己概念の“Wholeness”を示す発話内容であり、Table 5(2-2)「(多元型になりたいと思うことは)特にないです。今の自分自身に満足してるので。」は、“Totality”を示す発話内容であると言える。

つまり、Eriksonの活動期においても、自己の多面性をもちつつもアイデンティティを拡散させていない青年が存在していた可能性を考えると、自己斉一性・連続性という概念は、単なる“Totality”つまり、「自己はいつ何時も絶対的に一つのみ」という解釈だけではなく、“Wholeness”の考えから、「異なる各部分を斉一的にまとめて、自己という組織ができていく」という解釈ができるのではないだろうか。今後は、多元的なアイデンティティを“Wholeness”の視点から捉えて検討を行うことで、従来とは異なる知見を得られることが期待される。

3. 今後の課題

研究においては多元型の青年を、従来のアイデンティティ概念において確立された状態に属するものとして捉えてきたが、木谷・岡本(2019)は、多元的なアイデンティティをもつ青年について、現時点では複数の自分を本当の自分として受け入れていても、今後、進路決定など一つの選択を迫られる状況に陥った際、葛藤が生じる可能性も考えられると述べている。確かに、多元型青年は現代的な適応のあり方を体現していると考えられるが、その心理的意味は一樣ではないことが推察される。本研究においても、ポジティブな自己受容に基づく場合もあれば、不安や葛藤を内包しつつ自己変容志向に支えられている可能性も示されている。また、将来的には進路選択や社会的役割の固定化に伴って、その柔軟さが葛藤を招く可能性もある。したがって今後は、多元型青年を単に「確立型」としてのみ捉えるのではなく、自己受容性・自己変容志向・社会的移行期における課題といった複数の視点から理解する必要があると言える。

加えて本研究においては討究に至らなかったが、多元型においては女性が有意に多い可能性が示されている(Table 1)。今後、性差を考慮したさらなる分析を行うことで、多元型青年のアイデンティティ形成過程に関する理解が一層深まると考えられる。

引用・参考文献

千島雄太(2014). 大学生における自己変容に対する志向性の諸側面：人格発達、心理的適応との関連に着目して
青年心理学研究, 25, 85-103. https://doi.org/10.20688/jsyap.25.2_85

- Erikson, E. H. (1959). *Identity and The Life Cycle*. International University Press.
(エリクソン, E. H. 小此木啓吾 (訳/編)(1973). 自我同一性 誠信書房)
- Erikson, E. H. (1968). *Identity: Youth and Crisis*. W W Norton & Co Inc.
(エリクソン, E. H. 中島由恵 (訳)(2017). アイデンティティ: 青年と危機 新曜社)
- 伏見友里・井森澄江 (2017). 女子大学生の自我同一性地位と社会的問題解決能力 東京家政大学附属臨床相談センター紀要, 17, 23-33.
- 林 文俊・堀内 孝 (1997). 自己認知の複雑性に関する研究——Linvilleの指標をめぐる—— 心理学研究, 67, 452-457. <https://doi.org/10.4992/jpsy.67.452>
- 岩田 考 (2006). 若者のアイデンティティはどう変わったか 浅野智彦 (編) 検証・若者の変貌—失われた10年の後に(pp.167-188) 勁草書房
- 加藤 厚 (1983). 大学生における同一性の諸相とその構造 教育心理学研究, 31, 291-302.
https://doi.org/10.5926/jjep1953.31.4_292
- 川崎由莉奈 (2024). 青年期における多元的自己とアイデンティティとの関連——女子大学生を対象としたインタビュー調査—— 跡見学園女子大学心理学部紀要, 6, 15-32.
- 桐山雅子 (2010). 現代の学生の心理的特徴 日本学生相談学会50周年記念誌編集委員会(編) 学生相談ハンドブック (pp. 30-34) 学苑社
- 木谷智子・岡本祐子 (2016). 自己概念の多面性と心理的Well-beingの関連 青年心理学研究, 27, 119-127.
https://doi.org/10.20688/jsyap.27.2_119
- 木谷智子・岡本祐子 (2018). 自己の多面性とアイデンティティの関連——多元的アイデンティティに注目して—— 青年心理学研究, 29, 91-105. https://doi.org/10.20688/jsyap.29.2_91
- 木谷智子・岡本祐子 (2019). 自己の多面性とアイデンティティ研究に対する今後の課題 青年心理学研究, 30, 174-178. https://doi.org/10.20688/jsyap.30.2_174
- 三好昭子 (2016). アイデンティティ理論におけるホールネスとトータリティ: 生徒指導・進路指導におけるトータリティの問題 帝京大学短期大学紀要, 36, 115-130.
- 水本深喜・山根律子 (2011). 青年期から成人期への移行における母娘関係——「母子関係における精神的自立尺度」の作成および「母子関係の4類型モデル」の検討—— 教育心理学研究, 59, 462-473.
<https://doi.org/10.5926/jjep.59.462>
- 西田若葉・沖林洋平・大石英史 (2011). 大学生の多元的アイデンティティと適応機能の関連 山口大学教育学部紀要 (研究論叢 芸術・体育・教育・心理), 61, 81-92.
- 西平 直 (1993). エリクソンの人間学 東京大学出版会
- 大谷宋啓 (2019). 友人関係における大学生と成人の比較——1960年以前出生の成人を比較対象として—— 滋賀大学教育学部紀要, 69, 189-200.
- 佐藤 徳 (1999). 自己表象の複雑性が抑鬱及びライフイベントに対する情緒反応に及ぼす緩衝効果について 教育心理学研究, 47, 131-140. https://doi.org/10.5926/jjep1953.47.2_131
- 佐藤裕樹・岡本祐子 (2010) 大学生におけるアイデンティティの確立と時間的展望——TAT物語にみられる時間的統合の観点から—— 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, 9, 54-66.
- 渋川瑠衣・松下姫歌 (2010). 大学生における自己の変動性・多面性の概念について——学生相談における臨床的理解と意義の視点から—— 広島大学心理学研究, 10, 171-183.
- 清水裕士 (2016). フリーの統計分析ソフトHAD: 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.
- 下山晴彦 (1992). 大学生のモラトリアムの下位分類の研究——アイデンティティの発達との関連で—— 教育心理学研究, 40, 121-129. https://doi.org/10.5926/jjep1953.40.2_121
- 杉浦 健 (2017). 多元的自己の心理学 これからの時代の自己形成を考える 金子書房

- 杉山 崇 (2018). 心理学研究におけるパラノイア感・抑うつ感の定義と測定尺度の作成——被受容感・被拒絶感, 賞賛獲得欲求, 社会的スキル, 疲労感との関連の検討—— 心理相談研究, 9, 1-11.
- 田島 司 (2013). 自己の一貫性と認知的不協和——自己の多面性は必ず認知的不協和をもたらすのか—— 北九州市立大学文学部紀要(人間関係学科), 20, 49-55.
- 高石恭子 (2000). ユース・カルチャーの現在 小林哲郎・高石恭子・杉原保史 (編) 大学生がカウンセリングを求めるとき: ころのキャンパスガイド(pp.18-37) ミネルヴァ書房
- 高石恭子 (2009). 現代学生のころの育ちと高等教育に求められるこれからの学生支援 京都大学高等教育研究, 15, 79-88.
- 鳥居登志子・福本 俊・安藤朗子・島津智加代・福田きよみ・草地里枝 (1991). 自己概念の形成過程に関する縦断的研究VI 日本女子大学児童研究所紀要, 10, 31-88.
- 吉田昌宏・雨宮 怜・坂入洋右 (2019). 日本版無条件の自己受容尺度の開発および信頼性と妥当性の検討 筑波大学体育系紀要, 42, 21-32.
- 吉中 淳 (2016). 大学生における同一性地位と進路成熟態度の関連 弘前大学教育学部紀要, 116, 67-75.

付記

本論文は、令和元年度京都教育大学大学院修士論文に加筆・修正を加えたものである。調査にご協力くださった学生の皆様をはじめ、本研究にご理解とご支援をいただいたすべての方々に厚く御礼申し上げます。